慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	オクターヴの死
Sub Title	La Mort d'Octave
Author	古屋, 健三(Furuya, Kenzo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.77, (1999. 12) ,p.279(206)- 291(194)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	井口樹生, 高山鉄男両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00770001-0291

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オクターヴの死

(La Mort d'Octave)

古屋　健三

スタンダールの小説の主人公たちは死に際がみごとである。それぞれにふさわしい死に方で，宿命を生き切った者にのみ許されるすがすがしさが漂っている。多くの女性に惜しまれながら断頭台の露と消えていくジュリアン・ソレルの死も美しいし，恋人も子どもも失くした後で，ロウソクがもえつきるように，ひっそりと息を引きとるファブリスの死も切ない。

しかし，なんといっても，『アルマンス』の主人公オクターヴの死は飛び抜けて印象的である。ジュリアン，ファブリスと違って，オクターヴの死が自殺だからだろうか。それも，決定的な挫折をして真っ逆さまに死のなかに飛びこむ一般的な自殺ではなく，初めからわけもなく死ぬことばかり考えていて，最後に来てやっと死ぬ手順をみつける必然的な自殺だからか。死がこれほど遍在し，これほど死を歓迎した小説は他には知らないが，この作品をこよなく愛読した三島由紀夫は「『アルマンス』について」というエッセイのなかで，オクターヴの死の場面を「終局の詩的結晶，と称え，『アルマンス』を最初に高く評価した「ジイドを魅したものも」その「詩的特質であったのであらう」と推定している。

たしかに，「アルマンス」は十九世紀レアリスム小説というよりは散文詩といった方がぴったりの明澄で，繊細な言語世界を展開するが，だからといって，三島が言うように，『アルマンス』が「小説における極限的実験」であるかどうかは検討の余地があるところだろう。

どちらかといえば，『アルマンス』は十九世紀初頭に書かれた『ルネ』『オーベルマン』『アドルフ』といった私小説の流れをくむ作品で，十九世紀レアリスム小説のなかでは古いタイプに属すると思われるが，とりわけ

『ルネ』はその主題といい，叙述といい，『アルマンス』と姉妹作品といっていい共通点をもつ。ルネをむしばむ無為，孤独，その虚しさの穴のなかから鎌首をもたげる自殺願望，姉アメリーとの親密な心の通い合い，そして突然弟ルネを避け始める姉アメリー。『ルネ』のこうした物語の展開には，自殺願望を抱きながら従妹アルマンスには心を許し，これによって致命傷を負ってしまうオクターヴの悲しい生涯が重なってみえてくる。

しかし，それにもかかわらず，『ルネ』は『アルマンス』とは似て非なる物語である。『ルネ』では，最後に，なぜアメリーが弟ルネに共感を抱きながら接触を避けるのか，その理由が明解に明かされる。姉が弟に対して肉親愛を逸脱して，異性愛を抱いてしまった顚末が明かされるのである。俗世をすてて修道院に入るアメリーがたんなる厭世癖にとらえられたのではなく，自身のおぞましい情熱に怖気づいて思い切った決断をしたことが明かされる。『ルネ』の物語は性の思いもかけない深淵を覗かせて幕を閉じる。人間の黒々とした謎に光をあててその使命を終る。ここには疑いなく完結したドラマがあり，それにともなうカタルシスがある。『ルネ』は確かに首尾一貫した古典的な悲劇である。

それに対して，『アルマンス』では，オクターヴが死んで行く理由はきちんと説明されない。アルマンスの心が信じられなくなって，オクターヴは結局死を選ぶのだが，それにしてはふたりが一緒に過す最後の時があまりに幸福であり，濁りが感じられない。偽の手紙にだまされて，オクターヴはアルマンスの虚像を信じてしまうのだが，たとえその思いこみがどんなに強くても，これだけで死ななければならないとはとても思えない。手紙は死への願望を実現させる契機に過ぎず，その願望を誘発したようにはみえない。もともと最初からオクターヴの心のなかには自殺願望が強く根づいていて，手紙はその思いに火をつけたに過ぎない。それでは，なぜオクターヴがそれほど強く死を願うようになったのか，その明確な理由はなにも述べられていない。ただオクターヴはそんな人間として呈示されているだけである。しかし，その呈示は小説の冒頭から明確で，曖昧なところは少しもない。

オクターヴはなにも望まなかったし，なにごとも彼に苦痛も歓びももたらさないようにみえた。

(Octave ne désirait rien, rien ne semblait lui causer ni peine ni plaisir.)

オクターヴは生きる意欲も目的ももたない無関心人間なのだが，なぜ彼がこんな無気力な人間になってしまったかは物語をたどっていくといくらかは察することができる。まず，大革命，ナポレオン体制と激動の時代につづく王政復古という停滞した，抑圧の時代背景。その退廃した時代をリードする立場にいる大貴族という家柄の重圧。そして，なによりも息子のことしか眼中になく，成人した息子の健康を気づかってはらはらする母親の巨大な存在。それではオクターヴが虚勢された，情弱な青年かというと，そんなことはなく，信義を重んじて行動する積極的な側面ももつ。

もし義務が声をあげなければ，彼のうちには行動するのに必要な動機はなかっただろう。

(si le devoir n'avait pas élevé la voix, il n'y eût pas eu chez lui assez de motif pour agir.)

それでは，オクターヴの生涯は課せられた義務をひとつひとつ遂行していく経過かというと，それも正確ではなく，じつは心の奥底にひそかな願いを隠している。お前は義務の権化（devoir *incarné*）かと伯父に問いつめられて，オクターヴを答える。

創造主に頂いたままの純白な魂をお返しできたらと願っています。

(que je voudrais pouvoir rendre mon âme pure au Créateur comme je l'ai reçue!)

オクターヴが自殺の概念と慣れ親しむのはこんな位相からである。彼は地上におりた天使にたとえられるが，現世と係って手を汚すのを嫌う傾きがある。しかし，ふしぎなことに，オクターヴはこの時代に猖獗を極めていた神秘主義者ではなく，ピエール・ベール，エルヴェシュウスなど18世紀イデオローグを愛読する，理工科学校出の合理主義者である。このように，オクターヴにおいては情と知との働きが相反していないとはいえない

までも，一致して同じ方向に働いているとはいえない。情か知か，どちらかの道に決断できれば，まだしもオクターヴは幸せだったかもしれないが，それはまた別な物語である。オクターヴの最大の問題は知の道に生きるにはマリヴェールという由緒ある名をすてなければならないと思いこんでいる点である。ルノワール（Lenoir）といった平凡な名のブルジョワになりすまして地方で数学を教えるか，工場で技師となって働くか，いっそのことイギリス大貴族の召使いになるか，こうした現実離れした，空想的なプランしか考えない。賠償法で転りこんでくる200万フランを資本に工場でも起せば，学んだ知識は生きると思うが，実現可能な方向に頭は動かない。この点モーリス・バルデシュ『小説家スタンダール』（Maurice Bardèche『Stendhal romancier』）は，バルザックと対比しながら，スタンダールの劇的構成力の弱さを指摘している。200万フランが転りこめば，バルザックなら，どんなに胸がときめく緊迫したドラマを創りあげるかしれないのに，スタンダールはたかだか主人公の結婚条件が有利になった要素としてしか用いない。これがヒロインならまだしも，成人した男子の境遇の変化としてはあまりにスケールが小さ過ぎるのではないか。しかし，これは作者スタンダールのドラマ性の欠如というより，主人公オクターヴの意識の古さに問題があるのかもしれない。マリヴェール家の血を絶やさないことが長子オクターヴの第一の義務だとすれば，財産が増えたことは第一に結婚しやすくなったと意識されてもふしぎはない。どうせ自分は種馬だからとパリの大貴族令嬢とせっせと見合い結婚をし，男子が誕生して親の歓ぶ顔をみてから自殺する手もあったのである。これなら世の義務を果したうえに空しい自分の人生に見極めをつけたことにもなる。

しかし，このように皮肉に人生を割りきれないのは，アルマンスという心の友がオクターヴにはいるからである。アルマンスはオクターヴの遠縁にあたる娘だが，財産のない，身分もあまり高くない，すこし風変りな美少女である。オクターヴはアルマンスと腹蔵なくなんでも話し合う仲だったが，賠償法の成立からふたりの関係はおかしくなる。オクターヴが大金持ちになって俗物と化したのではないかとアルマンスは疑惑を抱くからで

ある。

あの人も他の男と変わりなかったわ。あんなに高貴な心の持主はいないと思っていたのに，200万フラン入ってくると思ったら動顛しちゃうんだから。

(Il est comme tous les autres ! Une âme que je croyais si noble être bouleversée par l'espoir de deux millions !)

アルマンスが友人にもらしたこの批評を立ち聞きして，オクターヴは雷でうたれたような衝撃を受け，アルマンスを特別な存在として意識する。これまでのように悩みを語り合う友人としてではなく，同じ価値観をもった同人種として特別に意識する。ここからふたりが異性として恋愛，結婚を視野に入れる関係になるのは一歩だが，じつはこの一歩がふたりの抱える根源的な問題をあぶり出すことになる。

まず，ふたりの結婚はたんなる財産の結びつきではなく，心と心との結びつきという複雑な様相を呈する。たんなる社会上の形式ではなく，男女の完全なる合体を意味する実質的な行為となる。アルマンスとオクターヴとは結局この至福に到達できず，挫折の悲劇を味うのだが，どの角度からみても結ばれて当然のふたりはなぜ挫折するのか。

アルマンスの側から考えてみると，結婚の障碍になる条件はただひとつしかない。大貴族マリヴェール家に嫁ぐには名もない田舎貴族にすきず，どうみても身分違いの結婚にしかみえず，アルマンスが幼なじみのオクターヴを誘惑したとしか解せられない。アルマンスが最後までこだわるのもこの面子の問題である。

アルマンスがこの障害をはねのけてオクターヴと一緒になるのは，オクターヴが自分はふつうの人間ではない（monstre）と異常性を訴えたからである。アルマンスはオクターヴに同情して，オクターヴの暗い宿命を分つつもりで一緒になるのである。このときアルマンスには玉の輿に乗るという誇りはなく，なかなか口にできない，暗い過去を抱えた犯罪人と償いの時をともに過そうという献身的な態度になっている。社会的視野は抜けおち，ただオクターヴ個人に対する愛しさだけが生きている。アルマンス

は家同士の結婚という旧来の結婚観から当人同士の結婚という近代的結婚観に脱皮している。ふたりが幸福に暮せるところなら，パリを離れてもいいとさえ考える。

もしフランスを離れなければならないのなら，と彼女は考えた，そして遠くで流浪の身にならなければならないのなら，たとえそこがアメリカであっても，いいわ，旅立ちましょう，と彼女は歓喜をもって考えた，それも一刻も早い方がいいわ。そして彼女は人ひとりいない孤独な場所とか無人島とかをあれこれ気ままに想像した。ここに報告するにはあまりに現実離れしていて，とりわけ小説にさんざん書き古るされた空想である。

(S'il faut quitter la France, se disait-elle, et nous exiler au loin, fût-ce nême en Amérique, hé bien, nous partirons, se disait-elle, avec joie, et le plus tôt sera le mieux. Et son imagination s'égara dans des suppositions de solitude complète et d'île déserte, trop romanesques et surtout trop usées par les romans pour être rapportées.)

これでみれば，アルマンスはすくなくとも『ルネ』を愛読し，ルネ文学の影響下にあったことがわかる。

しかし，問題はオクターヴである。なぜオクターヴは結婚を避けるのか。アルマンスを愛していながら，なぜ真直ぐ結婚にたどり着かないのか。この点にかんしては実のところ厄介な問題がひとつある。作者スタンダールが友人メリメあての手紙（1826年12月23日付）でその理由を説明しているのである。作者が謎解きをしてくれているのだから，ほんらいならこれほど便利で，これほどありがたい話はないはずだが，ところが，実際には困惑してしまうのは，与えられた鍵がオクターヴは性的不能者であるという思いもかけない種明かしだからである。いま少し正確にいえば，性的不能者という解答内容それ自体よりも，その答えがテキストの読解からはすなおに出てこない類の内容だからである。いかほど無心にテキストを読んでも，オクターヴが性的不能者だというイメージは得られないし，オクターヴがそのコンプレックスに悩んでいる姿も浮かんでこない。たしか

に，オクターヴは母親も心配するほど風変りだし，根強い自己嫌悪にとらえられている。しかし，これは肉体上の欠陥を原因としているというよりも，デュケレルをはじめ，パリの名医たちがこぞって診断したように「当代の，それも貴族階級の青年に特有なあの満たされることのない，批判的な悲哀」(Cette sorte de tristesse mécontente et jugeante qui caractérise les jeunes gens de son époque et de son rang) を原因としているように思われる。テキストの言語もまたオクターヴの生理を追うよりも，その心理を追いかけている。『アルマンス』は恋愛小説なので，もしオクターヴが不能者ならば，その不幸な徴候は随処に出てもいいのではないか。たとえば，アルマンスの美しい腕に心動かされ，外界の一切を忘却してしまう場面には性的不能を感じさせない明るさがある。「自分の心のなかに起っていることに驚いていたのと，胸にしっかりと抱えこんでいたアルマンスの美しい腕がわずかに薄い紗で覆われているだけなのに心乱れて，彼は他のなににも注意が向かなかった。」(Mais il était si étonné de ce qui se passait dans son cœur, si troublé par le beau bras d'Armance à peine voilé d'une gaze légère qu'il tenait contre sa poitrine, qu'il n'avait d'attention pour rien) ここには愛する女性の美しさにすなおに感動している純真な青年がいるだけで，不能という暗い傷に苦しんでいる青年の屈折した姿はない。スタンダールの愛読者ならこの場面からジュリアン・ソレルがレナール夫人に初めて出会う場面を連想するだろう。ジュリアンもまたレナール夫人の美しさに驚いて，なにもかも忘れてしまうのである。(Bientôt, étonné de sa beauté, il oublia tout, même ce qu'il venait faire) 女性の美しさに魅せられて，忘我に陥ることは極めて正常な男性の反応で，もし異常者なら，逆に，他人と異なる自身の深い闇を意識しただろう。ゾラ『野獣人間』(*La Bête humaine*) の主人公ランチェが女性の胸をみるたびに自身のなかに眠る殺意を自覚するような具合である。それに，ジュリアン・ソレルは不能などころか，欲望の塊りだから，女性に対してジュリアンと同じ反応をするオクターヴが性的不能者であるとは簡単には断言できない。ただ，オクターヴの場合，死を願う衝動が強く，なに

かと言っては自殺願望が頭をもたげることは確かで，それも生きることが嫌になった結果死を願うのではなく，凡人が自ら生の道を選ぶごとく，オクターヴは自然に死の道を辿ろうとする。オクターヴにとって死は至高の価値なので，できればすぐにでも死にたいのだが，その実施を妨げているのはオクターヴの優しさだといえる。母の悲しむ顔を想像するとつらくて死ねないのである。世間に顔出しするようになってからは，アルマンスの誠実で，気高い心に価する人間になることがオクターヴの生きる目的となるが，この位相では『アルマンス』は友情の物語にほかならない。それが恋愛物語に横滑りするのは作者スタンダールがもともとエロス人間だからというよりほかにないだろう。こうした観点からすると，オクターヴは不能なのではなく，死を離れられない恋人として憧れているとみた方が自然である。オクターヴが死の懐のなかでどれほど安らぎ，どれほど幸福かあげていけば枚挙に暇がない。

もともと，オクターヴの眼はときとして天をうっとりと眺め，そこにこの世にない幸福を認めたりしている。(Ils [ses yeux] semblaient quelquefois regarder au ciel et réfléchir le bonheur qu'ils y voyaient) 一見すると，オクターヴは夢想家にみえるが，じつはこのとき天界の幸福は確実にみえていたと考えられる。そうでなければ，雨の降る夜馬車に圧しつぶされそうになって「あゝ！　なんで殺されなかったんだ！」(Dieu! que n'ai-je été anéanti!) と無念そうに呟くこともなかっただろう。また，小鳥を撃ちに来た子どもの手で誤まって殺されたいと願うこともないだろう。「あゝ！　このかっかとのぼせあがった頭に一発銃弾を喰えばなんと気もちのいいことだろう！　死ぬまえに時間があればその子にたんとお礼を言いたいくらいだ！」(Dieu! quelles délices de recevoir un coup de fusil dans cette tête brûlante! Comme je le remercierais avant que de mourir si j'en avais le temps!) さらに，ムドンの森の決闘場に赴く移動時間が死を前にしたもっとも甘美な時と受けとめられることもないだろう。(L'heure silencieuse que l'on mit pour aller de Paris à Meudon fut pour Octave l'instant le plus doux qu'il eût trouvé depuis son malheur)

このようにたえず死と親しく戯れていればこそ，オクターヴは最後に美しく，微笑を浮べながら（Le sourire était sur ses lèvres）死んでいくのである。アルマンスの真心が信じられなくて絶望のあまり自殺するのではなく，一日延ばしにしてきた死との甘美な合体をやっと実現したといえるだろう。『アルマンス』は結婚物語だが，花嫁はじつはアルマンスではなく，死神だったのではないか。

この点にかんして興味深いのは，ヘレナ・シロニイ「『アルマンス』の結末あるいはヒーローの死」（Helena Shillony : Le dénouement d' "Armance" ou la mort du héros, dans "*Stendhal club*" n°83）のふたつの指摘である。ひとつは『Armance』が impuissance（性的不能）と韻を踏んでいるのではなく，むしろ démence（狂気）violence（狂暴）carence（欠乏）méfiance（不信）absence（不在）silence（沈黙）といった言葉と韻を踏んでいるというのである。たしかに，「狂気」をはじめシロニイがあげている特徴はそれぞれオクターヴの行動のパターンを表していて，オクターヴは状況によっていずれかの型でふるまっている。これに対し，「不能」はそれら特異な行動の原因であって，現象ではない。しかも，狂気，狂暴，欠乏などの現象を描きながら，『アルマンス』のテキストは不能という実体に焦点を結ぶようには構成されていない。オクターヴがアルマンスにあてた最後の手紙が読者に公開されないように，オクターヴが抱えた秘密は明かされることがないまま墓場に持ち去られる。十九世紀小説特有の謎解きがなく，欠乏，不在，沈黙の相を露にする。レナール夫人を狙撃するジュリアンの心の動きが語られないように，オクターヴも最後に言葉を超えた世界に飛び出してしまう。もはや理解の問題ではなく，オクターヴに共感できるかどうかが問われる。こうした結末をみると，スタンダールは物語の最後に来て描写をすて，言葉を本質の影として機能させていることがわかる。オクターヴのように社会の規範から外れた，天使のような特異存在をくすんだ日常の言語でとらえるわけにはいかないのである。もしむりにとらえれば，不能とでも呼ぶよりほかになかったのだろう。同じように，オクターヴはアルマンスに自分の不可解さを示して罪人

(criminel) とか人でなし (morstre) とか言うよりほかにない。

シロニイの論文でいまひとつ着目すべき点は『アルマンス』の最終章が序章と呼応しているという指摘である。(Le derrier chapitre fait écho au premier)。シロニイはその証拠として，われわれが前に引用した「オクターヴはなにも望まなかったし…」(Octave ne désirait rien …) と，最終章で結婚の準備を進めるオクターヴの類似の反応をあげている。

驚いたことに，こうした義務を果たしながら，自分にとってなにもつらくないことに気がついた。それというのも，もはやなにも彼の興味をひかなかったからである。彼は世間に対して死んでいた。

(A son grand étonnement, il observa en remplissant ces devoirs, que rien ne lui était pénible ; c'est que rien ne lui inspirait plus d'intérêt. Il était mort au monde)

物語の終り近くまできて，オクターヴがいまさらながら気がつくことは，すでに物語の初めでわかっていたことであった。オクターヴはひとつの物語を生きながらその果てでまったく変っていないのである。アルマンスとの経緯はいったいなんだったのだろうか。そもそもアルマンスとは何者なのか。アルマンスはオクターヴの恋の対象であり，結婚相手なのだが，わかりにくいのはそれ以前に腹蔵なく語り合える幼なじみだったという前歴である。ふたりはどのように親しかったのか。なにを語り合ってきたのか。オクターヴの心には母親の影が濃く射していることはわかるが，アルマンスはみじんも意識されていない。ふたりは心の闇を共有するほど親しく描かれていない。オクターヴはアルマンスをどこか信用していないし，アルマンスは貧しい小貴族のコンプレックスを捨てきれずにいる。ふたりがお互いの肉体を意識する以前に邪気なく語り合った無心の光景が描かれることはない。それもそのはずで，もともと，オクターヴは鏡張りの書斎に籠るのを理想とする徹底したナルシストで，他者と胸襟を開いて語り合う姿は想像しにくい。ましてや恋人の存在などとても想像できない。それが恋をするのだから，内心の葛藤の激しさは一通りではなく，アルマンスを殺すか，自我を解放するか，死闘が演ぜられることになる。結果は

アルマンスを迎え入れることはなく，自殺によって頑に自己を守り抜いて殺す。つまりこれは成長拒否の物語であり，元祖オタク族の自己保存物語である。ベルマン・ノエル『道ふさぎの作者，スタンダール：アルマンス』(Jean Bellemin-Noël: L'auteur encombrant Stendhal, Armarce) はこの観点から書かれた精神分析的なアルマンス論で，オクターヴの直面している問題を明解に述べている。「ある意味では，オクターヴの問題は，彼が男であることを感じ，示すことではなく，彼が女から生まれてきたこと，—真に，個別的な存在として生まれてきたこと，そして，彼の母は女であり，彼は別の種属に属することを実感することである。」(D'une certaine façon, le problème d'Octave n'est nas de sentir et de montrer qu'il est un homme, c'est de réaliser qu'il est né d'une femme—qu'il est né véritablement, comme un être distinct, et que sa mère est une femme tandis que lui appartient à une autre espèce.)

オクターヴの真の問題は母親からの乳離れだったのだが，オクターヴにはまったくその問題意識はなかった。ぬくぬくと母親の懐のなかにいて，母親の意のままにふるまっていた。この時代，男として生きようとすれば，大貴族の名に対するこだわりをすてて，学校で身につけた知を生かして身を立てるよりほかにないと思うが，オクターヴは学校から社会に飛び出さないで，のこのこ家に戻ってきてしまう。となればあとは大貴族としてふさわしい生き方とはなにかを極める道しかない。オクターヴがアルマンスとたどる道が安易な色恋沙汰ではなく，『クレーヴの奥方』に代表されるきびしい倫理の世界になるのはそのためである。『アルマンス』がどれほど『クレーヴ』の影響を受けているかはジョルジュ・ブランが『アルマンス』(ラフォンテーヌ版) の序文で明らかにしているが，とりわけ，ストイックで，気高く，純粋な言葉の使い方に『クレーヴ』の影響は濃いという。たしかに，自尊心に貫かれて，心理の動きだけを追ったその手法は古典的で，まるでコルネイユの高貴な意志の世界を思わせる。この張りつめた言葉の美しさは比類がなく，その言葉の波に乗せられてオクターヴの自殺までなんの不自然もなく辿り着いてしまう。オクターヴが最終的に

自殺を決意するのはアルマンスの友人あての手紙をみてのことだが，このときから死までは一直線で，ただ手続きだけである。レナール夫人を撃ちに行くジュリアン・ソレルもそうだが，死と向かい合った人間はそれだけがすべてで，頭が真白になり，生きることに伴うよけいなデテールを考慮しない。スタンダールはこのような直線的な走りをオクターヴの最後で描いてみせる。それはこよなく美しく，冒頭で述べたように，詩的でさえあるが，小説としては堕落ではないかとシロニイは断じている。「『アルマンス』の結末は神話と美のなかに逃避し，意識から逃れ，根源に回帰していて，小説の現実的虚構を超え，詩のなかに崩壊している。」(Evasion dans le mythe, dans la beauté, fuite devant la conscience et retour aux origines, le dénouement d' *Armarce* dépasse la fiction réaliste du roman pour s'abolir en poésie.)

オクターヴの死が小説的であるためには，アルマンスの手紙をめぐってふたりの間に争いがあるべきだし，オクターヴがアルマンスの手紙を盗み読みしたうしろ暗さも分析されるべきだし，オクターヴがアルマンスにあてた告白の手紙の内容も明らかにされるべきだろう。しかし，死を決意したオクターヴにとっては上述の問題点はすでに乗り超えられていたので，ただ死に向かってまっしぐらに走り抜けていく態勢を整えることだけが大事であった。ということは，小説は生者の芸術であって，死んでいく者をとらえることはできないということになるだろうか。『アルマンス』の結末はここで歌になっているのだが，だからといって，死の充満した『アルマンス』の序幕も歌だということにはならないだろう。致し方なく生きている人間と死を決意した人間とはまったく別人なので，『アルマンス』一篇はなぜ，また，いかにしてオクターヴが死のランナーに変身するかを物語っているのだと思われる。

この点にかんして，ミシェル・クルーゼ「『アルマンス』のなかの現実」(Mchel Crouzet : Le Réel dans "Armance") はオクターヴをもっとも反抗的な人間としてとらえ，自我を大事にするあまり，自我を絶対視し，愛を拒絶する極限にまで至っていると説く。そして，現代の知が死んだ標本

としてしかとらえない不能者を，小説は躍動させるというのである。「Octave, le plus “noble” des héros stendhaliens, est peut-être le plus révolté : lui seul s'aventure jusqu' à ne pas aimer pour choyer son moi et le laisser dans l'absolu. Ce que les “savoirs” actuels figent, le babilan, le romanesque au contraire le prend dans sa lumière propre.」もちろん，この文脈でいえば，自殺は自己愛と反抗のクライマックスということになるのだろうが，大事なのはオクターヴの死は孤独でも，陰惨でもなく，その場に居合わせた人たちの心を動かしている点だろう。それは美しく，うるわしい光景であって，この世のものとも思えない眺めである。死がこれほどの愛しさで描かれたことはかってなかったのだが，それというのもオクターヴには年月をへた汚れがなく，純白に死んでいくからだろう。前述した『ルネ』には，ルネが無人と化した生家を訪ねて，人生の移ろいやすさ，人間のはかなさを実感する場面がある。「人間の家族はたった一日しか続かない。神の息吹きがそれを煙のように吹き散らかしてしまう。」(La famille de l'homme n'est que d'un jour ; le souffle de Dieu la disperse comme une fumée) この崩壊感覚，時の流れの重さ，おそらくそれが十九世紀レアリスム小説の共通認識なのだが，そのなかでただひとつ『アルマンス』だけはこの幻滅の図式から逃れている。それは『アルマンス』が死を内側から描き，したがって生の時間のなかに組みこまれていない唯一の作品だからである。

〔このエッセイは高山鉄男「死に損なった話」(「三田文学」1998年秋季号) に触発されて書かれたことを明記しておきたい〕